

社会的支援

というありかた



新春第1弾の企画は「ナイスダイアログ」です。

ゲストは(株)ナイスとも協力をいただいている、
大阪市立大学の水内俊雄教授です。

貧困ビジネスからグローバルシティまで、話は多岐にわたり長時間となりました。

(株)ナイスの富田社長、および非営利部門の佐々木室長が出席し、
水内教授のフィールドに迫りました。

テーマは「社会的支援というありかた」です。

紙面の都合上、座談形式をあらずじにまとめざるをえませんでした。

水内教授のご了解をいただきたいと思います。

(株)ナイス事業のスピリッツ、ミッション、そして本質にも迫る話になりました。

安定と混乱が背中合わせ

西成区では生活保護が増えたけど、ホームレスも減って、「居住へ」という流れができ、ホームレス支援もある程度安定してきました。いま、カマから居宅への第1世代にあたる人々に一種の転居ブームが起こり、同じ4万2千円（高齢者の住宅扶助限度額）ならと、完全ワンルームとかトイレと風呂セパレート型アパートなどに転居する人が増えたと、病院対応型と

いうか、社会的入院の人の受け皿を志向する住宅や、常時緊急入居枠を持って社



会的ミッションを発していこうという住宅など、選択肢も広がってきました。

一方、派遣切りなどをきっかけに、貧困者はたかりだ、貧困ビジネスというたかりがある…というようなメディアからの、いわば「外圧」が混乱を引き起こしています。そもそも、支援に対するサービス対価がつかないところで、生活保護の「目的外使用」みたいにやってきた支援ですから、ある種無防備ではあった、そこを突かれているという感じですね。しかし、根幹に、人が生きてるとか、支援やケアが働いているとかを正当に見ていないことがあります。評価して欲しいとまでは言わないが、冷静に見る目は持って欲しいと思いますね。けっきょく、ホームレス支援というのは社会に浸透していなかった。社会的な意味合いっていうのが、なんでこんなに飛んじやった理解になっているのかはがゆく思います。

忘れられた貧困

派遣村とかあって、若い人も含めて生活保護が活用され始めていますが、基本的に就労から引き出されるっていうか、出てくる人の問題を、日本ってそれを社会で背負うという意識が、やっぱり、かなりちっちゃいですよね。いままでは企業が右肩あがりだったから何とか隠してきたし、雇われる方も、派遣も楽だという安易さもあった。湯浅誠さんがよく言う「ためがきかない」というやつですね。しかし、それでは、生活保護は膨らみ、社会保険は細る、いわば社会は「二重の負担」を背負っていくような感じがしますね。



学問の世界でも、「貧困忘れ」という傾向があったと思うんです。貧困の研究も、福祉と密接に結びつく中で、すこく制度化しちゃって、「関係の貧困」とかも含めて、貧困そのものの探求が忘れられていたということになって、最近、ようやくナショナルなレベルの貧困研究がリバイバルしました。



アメリカ型の都市を見れば、繁栄するグローバルシティこそ、貧困率は高くなっていて、大阪市の比じゃない。貧困率20%とか30%とかいうむき出しの貧困があります。韓国でも、70・80年代の輸入代替産業が市街地から空洞化していくことで都市のあちこちに貧困地域ができて、そこで、住民がスラムクリアランスと闘うっていう形ですとやってきた。日本って、どこか、貧困を対人給付に限定してしまっ、リ・ジェネレーション（地域の再生）

というような視点は弱いですね。そういう意味では、大阪は絶対、社会再生・地域再生の実験道場だと思っているんです。その先端をナイスさんは走っていますよね。

対人支援型と事業志向型

派遣村って、一ヶ所にコンセントレーションキャンプみたいに集めてやっていくというもので、限定的瞬間支援ですよ。やっぱり、地域にどっかまとまるところやドロップインセンターがあって、そこで人材も育って、各地でいろいろ支援していくというのが求められますね。ナイスさんの「くらし応援室」なんてまさしくそれですよ。ボクは、ホームレス支援の調査をやっていて、日本の社会運動って何か、ものすごく気になっている、これがキーじゃないかと思っているんです。この分野でも、いま分岐が始まっているんじゃないかなと思う。旧来型からの「対人支援型」と、単なるプロテスト（抗議）だけでなく、事業を組み込んで社会サービスを大きくしていくという「事業志向型」との分岐です。後者には、ハウジング事業からホームレス支援に接近してきた人たちなども出て多様化しています。「もうひとつのホームレス全国調査」



で地方都市を訪ねて、いろんな異業種が会って、初めて横に繋がって、遠くまで動いたなあと感じています。

救護施設の通所事業ってありますよね。制度化されて10年ほどたちます。施設を出て、近所で学生なんか住んでいるマンションに住んだりもして、通所事業で見守って、安定した生活ができている、ああいう生活スタイルってものすごく重要だなあって思いますね。サポーターハウスでも、わずか3畳で、100戸詰め込んでいるけど、その相殺で、見守りが近接でできる、それ以上家賃を取らないで済む、そういうことも捨てがたいと思うんです。最初に言いましたけど、そういう現実の支援を見ないで、貧困ビジネスと切り捨てるのは、社会的でないというか、社会資源を意義づけそこなっていると思います。そういう意味で、ボクは、一人一人に対するアセスメント支援からアフターケア支援、それを支える人的、地域的社会的資源の広がりこそが重要だと思っています。

社会と大学のオルタナティブ

西成に拠点を設けてもう5年になる都市研究プラザは、院生以上が出入りするところですから、院生の出口をどう作るか、博士号を取ったアカデミシャンたちをどうするかが課題なんです。社会の潤滑油になれるプロフェッショナルというか、オルタナティブ（もうひとつの）な社会のコーディネーター、新しい職能集団を育てるのがプラザの得意とする他にない分野なんだろうと思っています。大阪市大も大阪市の意向ひとつで変わってし

まうことは大阪府大をみてもはっきりとわかります。社会のカネも動員して、新しい働き方、分野を拓く…そういうことを模索したいですね。

西成は、グローバルシティにあって、むきだしの貧困を受けとめていくドロップインセンターの機能を期待されている。

ブラザは、そこで、社会現象を客観化しながら、人と人をつなぐことに試行錯誤していますが、その立脚点を問い直しつつ、もう一段飛躍したいですね。ナイスさんと一緒に。

(記録：川井友二)



2010.01.19 談話

今回のトーカー

話し手



水内俊雄さん

1956 年和歌山生まれ。大阪市立大学都市研究プラザ（大学院文学研究科兼任）教授。著書に『モダン都市の系譜』（共著、ナカニシヤ出版）、『空間の社会地理』（編著、朝倉書店）、『「開発」の変容と地域文化』（共著、青弓社）、『経済・社会の地理学』（共著、有斐閣）など

聞き手



富田一幸
（株）ナイス代表取締役社長



佐々木敏明
（株）ナイス非営利部門
くらし応援室長 / 楽塾塾長

